



書法帖の話 (展示説明)

書法帖、習字手本のこと。昔の塾は、先生が漢学を講義しながら弟子に書き方、習字も教えました。

とくに亀井塾では、初代の南冥が「書は君子の顔なり」、つまり教養の徳を積んだ人士は、書も立派にできるとするものです。この認識によって、学問が出来ながら字が拙い者には習字の努力を要望しました。

この実例として、秋月藩の原古処に、詩才の抜群を賞しながら、書が劣ると指摘しています。古処は、素直に師の教えに従って書道に励み、これを家族とくに娘の采蘋にも自覚させます。今日、原古処の筆跡と采蘋少女時代の書が残っていますが、なるほどと思われれます。とくに亀井昭陽、長女少栗の筆跡を原古処父子の資料と比べるとよくわかり、采蘋と少栗は同年でもありました。

いま、能古博物館・亀井資料常設展に、書法帖を多数出展しています。

まず、亀井塾幼童書法帖。折り込み、一片の幅9cm、縦28cmで全長は、9m54cmです。内容は、唐詩五言絶句一五詩を書き分け、草書には必ず楷書を小さく書き添え、幼童に気づきやすい見せまします。

幼童は、四才から六才まで、七才になると少年です。武士家庭では袴を着け小脇差を指させ、もう幼童でない責任を自覚させました。

以上に、広瀬旭荘の書法帖。流暢で美事な行書体。内容は自作の偶詩と叙事詩、これで作詩時期が推察され、貴重な資料になります。折込みの幅8.7cm縦29cm、全長7m66cm。

広瀬青村書法帖。温和な楷書体で一片8.7cm、29cm、全長6m50cm。万延元年(1860)十一月和齋堂に書す、と奥書あり。

長三洲書法帖。行書体10・5cm×28・2cm全長6m09cm、三洲署名と印、長三洲は広瀬門の秀才で豊後天ヶ瀬出身、父の梅外と共に勤王志士、長州奇兵隊に入り活躍。寸暇に書法帖を作り資金を得たとされ、まさに当時の作品の一つです。署名と印。長府松嘯館の奥書。

大坂、中井頼山作、太字の楷書体で堂々の大判書法帖10・6cm×41・3cm全長5m72cm。

以上5点の書法帖を展示しております。この展示のため長さ9mの展示ケースを新設して全展開できるようにしました。また、御希望により学芸員が展示資料を取り出してお目にかけることもできます。

能古博物館を訪ねて

安 陪 光 正

犬と共に

今年は三月から四月にかけて雨ばかり、初めは柳芽を養う雨だと言つて喜んでいたが、菜種梅雨の長雨にはもうあきあきした。毎日の雨と風とで、とうとう花見もしないまま、

ぞろぞろ降りてきた。今日は土曜日、こちらから島へ渡る客は約二百人、

棧橋に長く何列にも並んでいた。

私たちは犬づれなので、最後に乗ろうと後に待った。犬はラブラドル・レトリバー、盲導犬によく使われる犬、賢明にしておとなしい。生

後二年半の雌犬、体重二十六キロ、淡黄褐色の短毛である。やさしい

眼は黒いアイシャドウをして、まっげは長い。眉は平安時代貴人のかいた丸い薄墨の眉に似て、またたく度

によく動く。ピロッドを思わせる軟らかな垂れ耳、尾はカワウソのよう

にたくましい。名前はフィル。妻と私が檻を持ち、娘が犬をつれて開札

口にかかったが、係の人は何も言わない。結局檻は使わぬまま犬は船に

乗ってしまった。フィルは始めての船だったが、デッキから白波を見お

ろしたままじっとしていた。元々この犬種はカナダのラブラドル半島

の産、厳冬の世界で網からこぼれる魚を回収して漁師を助けた犬である。

海や川を好む。はじめて見る海に、

どんな想いかと私はフィルの顔を見ている。

古窯址

棧橋を降り、博物館への道しるべに従って日ざしの中を歩いた。万山

新緑、どの家にもつつじが真赤に咲く。垣根つたいに這った通草の蔓から、濃紫の花房が枝毎に垂れている。

石段を登ると上の道へ出た。観音様へ詣ると言うお婆さんたちに尋ねると、境内を通って博物館へ行けると

教えてくれた。

受付で理事長さんを訪ねると、案内してくださると言う。この庄野先生は、秋月で亀陽文庫を開き、筑前

亀井学派の書画を展示、公開されていた方である。受付からだから坂

の広い道を、晩春の陽を背に先生につづいた。

最初に案内されたのは連房式登り窯、すでに天井は落ち、七室を区切る火道の磚と側壁とが残るだけ。こ

の古窯址は、保護のため、シート屋根ですっぱり覆われていた。先生に

よると、江戸期有田から逃げてきた一陶工がここに居ついて焼いた窯と

のこと。また、窯がもう一つ、この上の雑木林の山腹に埋まっているかも

しれないと言う。この二つの窯で交互に焼いた沢山の青花は、島の廻船

業者によって筑前米と共に大阪や江戸へ運ばれたそう。くずれ残った

窯址の側壁に、枯れた松の切株が数本太根を張っていた。窯址の内外に

業者によって筑前米と共に大阪や江戸へ運ばれたそう。くずれ残った

窯址の側壁に、枯れた松の切株が数本太根を張っていた。窯址の内外に

焼台、ハマヤトチが発堀時のまま散乱する。よく見ると赤茶けた窯場の

土に、笹の葉の一枚があたりになじまぬ緑葉をのぞかせるが、窯は発堀してはや三年にもなるそう。

先生の説明をうけ、雑木の若葉道を博物館へ向った。途中青空をバックに、穂のように垂れた櫟の花が、

環路のように枝々にゆれていた。あたりは明るい雑木の疎林、芽ぶく木々の若葉も色とりどり、木の下にやせ

たわらびが伸びていた。

南冥先生

博物館はまだ新しい瀟洒な二階建山腹に建つので二階が一階のようだ。

入口に立つと、右手は谷若葉、海を隔てて百道の埋立地が見える。ひと

さわ高いのがマリントワー、その背後に油山、さらに後に背振連山が黄

塵にかすむ。オールドスの胡沙が、毎年福岡にもやってくる頃だ。受付を

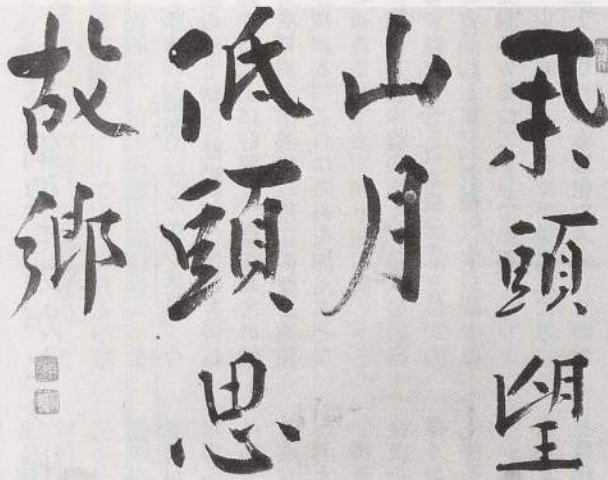
入って左手の部屋に古高取の床置がずらりと並んでいた。なかでも鯉の

瀧のぼりは、水面から跳ねた姿で宙におどる。次室は亀井南冥先生以下

その衣鉢をつぐ人々の書画がかけら

向うから、十二時十四分に折返す渡船が次第に近づいてくる。船が棧橋に着くと三、四台の乗用車が先ず

出て、あとから五十人ほどの乗客が



「頭をあげて山月を望み 頭をたれて故郷を思う」
南冥書、李白の「静夜思」の転結二句 (糸は挙の古字)
安陪家伝世の書

れていた。

南冥先生は寛保三年(一七四三)、島の対岸姪浜に生れた。十四歳、肥前の学僧大潮に師事、ついで京坂に上り永富独嘯庵に進歩的な医学を学んだ。二十二歳、福岡城下唐人町に父と共に開業、医学、儒学ともに令名高く多数の入門者をみた。三十六歳、黒田藩は土分に召抱え、四十二歳、天明四年(一七八四)藩は東学

問所として修猷館、西学問所として甘棠館を設立し、南冥を甘棠館教授に任命した。南冥の主宰する甘棠館には、全国から俊秀が集って盛況を呈した。しかし寛政四年突然藩命により蟄居(面会・外出の禁止)を命ぜられ、甘棠館教授も罷免された。五十六歳、寛政十年甘棠館は火災にあって全焼、亀井家も罹災した。文化三年(一八〇六)秋月藩主黒田長

舒によって南冥

著「論語語由」

が版刻された。

七十二歳、文化

十一年(一八一

四)また火災に

あい、焚死した。

墓は福岡市今

川の浄満寺にあ

り、今も門前に

「亀井南冥、昭

陽両先生墓所」

の碑がたつ。

鹿の島

博物館を出る

と青葉山がまぶ

しかった。先生

は新緑の山を指

しながら、

「この島には

昔鹿がいたんですよ、藩のお狩場で五、六百頭ぐらいたんですよ。藩主の鹿狩りは三十頭でやめていたのに、秋月藩主が百五、六十頭もとったことがあるそうで、秋月に持ち帰って家来に分けたが、それでも余るので町人にも与えたという記録があります」

「もういせんか」

「もういせん。昭和二十年の敗

戦前まではいたんですが、進駐軍が

鹿射ちに来て、その場でパーベキュー

にして食ったそうです。毎日のよう

に来るもんだから、またたく間に全

滅したと言います。村長があわれん

で、手を合わせて射たんように頼ん

だそうですが、米兵は笑ってきかな

かったそうです」

「今鹿がおれば奈良のような名物

になりますね」

「一時はそんなことを考え、奈良

の鹿をつれてきたそうですが、飼

馴らされた鹿は自分で生きてゆくこ

とができなかったそうです」

「対馬には野性の鹿がいますから、

あれならいいかもしれません。時々

海を泳ぐ鹿を生捕ったなどと聞くこ

とがあります」

「昔は鹿の棲む所と人間の住む所

とを分けて、その境界に鹿垣を築い

たもので、今も所々残っていますからご覧になってください。鹿の棲む向う側は三メートル程の垂直な石垣で、こちら人の住む方は四十五度ぐらい斜に石垣を築いています」

「沖繩の猪は今も多く、島の人口の十倍という所もあります。そこではフェンスで猪垣を作っていました。鹿が、昔の石垣も残っていました。鹿垣のように高くないですね」

私たちは先生と別れ、犬を先頭に山頂をめざした。山路を登りながら、先生のご温容と亀井学派の研究と顕彰にとめられる真摯な生き方に深い感銘を受けた。小人閑居する日々、もう日本も駄目かと思っていたが、先生に接しただまだ日本も捨てたものではないと意を強くした。

山路に野いちごが咲く。廃屋の八重桜も真盛りだった。山頂の展望台に立つと脚下に玄海がひらけ、天涯万里の海がかすんでいた。フィルは先にたつて春の山路をゆく。ふりかえって我々を確かめ、左右に尾を振りながらまた先にたつ。犬もまた我々と同じように能古の山路に洗心の情を覚えるのである。

(本文中南冥先生の略歴は、亀陽文庫のしおり「亀井南冥と一族の小伝」によつた)

原題『真翁聞きがき』

真翁銅像ものがたり (七)

- ・好事魔多し
- ・明治帝崩御と不漁
- ・男子三十にして立つ
- ・大阪の高利貸

年末、「樽新」さんから来信。今回の漁で特選鮭にした薄塩ものは思った以上に好評で、焼きたての鮭身をほぐし、熱いご飯にのせて茶漬けにする。これに海苔を加えるとなおよろしい、と。

塩は「日本塩がよく、輸入の岩塩はいけない」。日本橋で先々代からの食品卸し業、「食通」を自認される森本さんのご意見である。

いままで、とかく下等食品にされていた塩サケも出世できる。そのためには、塩の使い方も考える必要があると教えられた。漁場では、やたらに塩を使うだけで、農村、炭鉱など労働者向け食品にしている。ヒト切れの鮭で、朝昼晩の三食を通し、しまいには骨だけになって、なお塩気をしゃぶる。こうした先入感もあっての塩サケづくりが現場の粗雑な仕事につながっているのである。ぼくは、漁期を終えると函館水講に通い、もう三年になる。漁獲物の食品加工と保存について、研究と新

工夫が必要と痛感させられる。いまは専ら缶詰づくりの指導を受けているが、塩加工、塩蔵は昔ながらで変化がない、これも見直すべきであると考えた。

樽新さんとの出会いによって、資金その他出漁について不安がなく、ぼくの思考に余裕が生じていた。

樽新さんの紹介者である平塚氏から「相談があれば遠慮なく……」とされているが、いまは全くない。ただ今年の漁を終えて、樽新さんのオハラ漁区に缶詰工場の設備はどうかと聞きたかったが、まだ早いと自制していた。

今年は「樽新・特選薄しおさけ」づくりを念入りにやる。また在来の塩サケに砂のように塩づかいするの注意してみようと考えた。

悠々と、準備万端整えて、明治四十五年第五回の出漁である。漁夫、作業員も、まずは、ぼくが集めた二十一人の同勢である。全員が一季四〜五カ月の出稼ぎになるが、こ

れからは毎年の契約ができ、この中から数名は常雇いの手勢をつくりたいと思いつながらオハラに向け出航した。

しかし、好事魔多し。まさにこの諺の通りの事態に際会する。

北洋の時化は、執拗である。天候だから文句が言える相手ではないが風と海の荒れは、仕掛け網の損傷となり、網を失うこともある。網の予備はあるが仕掛け杭などは打ち直す。

明治期露領漁業の統計

明治年	租借者数	借者数	漁獲量(千尾)	漁獲額(千円)	従業員数	缶詰生産者数	缶詰生産数
41	119	55	8,900	1,490	5,370	—	—
42	183	87	20,532	2,832	5,844	—	—
43	157	87	25,265	3,638	7,613	1	704
44	224	107	64,620	5,636	10,581	2	4,332
45	214	99	27,757	3,561	12,775	8	24,801
大正2	215	95	48,227	6,893	13,144	8	81,518

サケも沿岸から姿を消す。ようやく網建てができたと思う間もなく次の時化に見舞われ、これが二カ月余のくり返して、全員凶年という。ようやく漁期も終わる九月になって、三回の漁獲になった。

「露領漁業統計」では、前年比46%であるが、これはカムチャッカ半島全統計で、東海岸60%、西海岸35%とされ、オハラは西である。

八月の末頃、明治天皇崩御(七月二十日)が伝えられた。

明治天皇が亡くなられるほどの年だ、不漁も当然かと、ぼくは思った。この中で、九月に形のよい鮭が獲れた。これから選別して腹も上手に取って国産塩で仕立てた。

十月下旬、例年になく遅い函館帰着になった。東北農村からの出稼ぎには、もう稲刈時期である。少い漁ながら、塩サケ相場は日置薄高値になった。これで出漁資金の回収見込みがついた。帰郷する人たちに、来年も頼むよ、と給金と塩サケ二十尾を土産にする。

樽新さん送りの特選品は、函館で女工を備い、念入りに一尾づつ薬つとにおさめ、二千尾を発送できた。

十一月中旬、帰漁後の整理も一段落し、出漁精算の作成中に、東京来

信。なんと十一月初め樽新さんご死去である。そちらの整理終了次第に上京願いたいというご遺族からの要請があり、急拠、出京した。

樽新さんは、十月末、特選鮭の到着を荷捌きされた後、十尾ほど提げて、伊豆の別荘に持参。持病の心臓発作で四日目に亡くなられたのである。

仏前で、父が新鮭をとでも喜び、すべて自分の思い通りに出来ているといわれたお話を聞き、これこそ、ぼくにとつて最大の言葉であった。

若主人は、そこで漁区のことですが、今後のこともあって、いまの私にはとても北洋漁業まで考えが及びません。「漁区」は、お約束通り真藤さんにお買い戻し願うとして、代金は五千円です。どうか。突然のことでご都合もおありと思いますが、来年の漁期が済んでお支払を願えば結構です。と。さすが東京日本橋の若旦那だあと感服。おだやかな話ぶり、しかも条件も若輩のぼくに配慮されたことがよくわかる。温情ひしひしとこたえるものがあった。感謝で承知するだけである。

なお、辞去する際に、これは父からの気持としてお納めくださいと金

一封(五百円在中)までいただいた。来年の漁を終え次第、きつと再訪し、あらためて謝恩を表明しようと思心に決め、ひとまず函館に引きかえすことにした。

函館では、まず平塚氏に委細を話した。彼も事の意外に驚きながらも君のためには最善だ、これからは自前ですれよ、と励ましてくれた。

函館に小さな事務所を構えた。年を越した。ぼくも満三十才(大正二年・一九一三)年の節目も良い。孔子先生曰く「三十而立(三十にして立つ)」の言葉通りではないか。

最近、漁区入札の期日がくり上っており、二月初旬にされる。応札と契約を早目に終え、ハルピンの川上さんに是非会いたいと考えた。

出漁資金を考えねばならぬが、当面の漁区租借契約金(約一、二〇〇円)は樽新さんのお蔭で、充分である。

今年までは、オペラ漁区だけでやる。本年の出漁成績で三漁区にした。それも東海岸を考えようと思案にしていた。

正月下旬、ウラジオに出発。

二月五日、漁区入札に応じ、およそ予定額におさまった。漁区も最近

は入札価格をロシア側でせり上げていく。日本側は、当初に総領事から、邦人同志で競争的にならない、契約漁区は同一事業者の継続租借を相互に優先する、等の指導がよく守られており、これにロシア当局の対策が感じられる。

ハルピンに川上総領事を訪ねた。

四十一年以来の話、今年から自分漁区を得た報告。川上さんには、君は予定通りの路線を走ったなあ、と喜んで貰った。五回の出漁経験を大切に、初心忘るべからずとして将来にいかすことだ。慢心は禁物、樽新さんの若旦那に学ぶべきだと訓されて、次の話に移られた。

これから世界の動きも変化する。産業革命が終って、労資の対立が国際的に拡大する。この中で、ロシアが一番立ちおくれしている。単に労使問題だけでなく民衆と政治の対立が社会に出る。もう古い君主制は徹底して追及される。これは、露領漁業にも影響が出ると思うので、現在の租借漁区零細は駄目になろう。大同団結、企業化を大きくし、また稼働内容の近代化を積極的に行うことだ。ロシアに大変動が起る可能性、その原因の一つは日露戦争後の社会民衆による決算でもあると、自分は考え

ると語られた。

川上さんのこうした予言はすべて当る。つまりは、大正三年世界大戦の勃発、その幕尻に起るロシア革命であるが、残念ながらぼくにその洞察はできなかった。不勉強を恥じながら、川上さんの話がぼんやり見える気がした。

友人、近江岸弁之助はいなかった。五年前、彼と別れる時、オレは手紙を書かないからね、と言ったことを思い浮べた。ぼくも筆不精していたが、彼は半年の予定でトルコに行っているという。川上さんに次いでぜひ会いたい男であった。

福岡にも帰りたいが、自前の出漁をしてからのことにした。

大阪に廻って、まず出漁資金の金策である。

大阪。頼光(たのこう)という金貸しを訪ねた。まず「あしたこい」、「あさってこい」で、振りまわされた。

次に「担保あるか」。ないと答える。二、三日して行くと、「担保できんかいな」、「担保は初めからな」と言っている、と答える。「そんなら駄目やがな」と言いながら「いったい、なんに使うんかいな」と聞く。最初に、ぼくの証明書代りに露領漁区租借契約書を見せて話している。

能古博物館だより

出漁資金に必要を説明した通りだ、と押しかえす。なお、過去五回ばかりが支配人として出漁した事業内容をくりかえし話す。

「うーん。水ものやなあ。一、二、三日考えて見るが、あかんかも知れんで…」という。

三日目に行くと、「まだ考えとらんのか。もう少し、待てんのかいな」と言いながら「銀行に話したんか、どうや」「銀行に相談できるくらいなら、ここに来ないよ。」こうした調子で二、三日おきに行く。「どこか、ほかに行くところないのかいな」「あるなら来ないよ。」「いったい。

うちにこん時は、なにしてんのか」と聞く。「魚を釣ってるよ」と答えた。「なんの魚かいな」という。「金魚だ」という。事実、ぼくは頼光が二、三日してこい、と言う二、三日は道頓堀端にならぶ屋台掛けの金魚すくいで時間つぶしていた。これで金魚屋のおやじ数人に顔なじみが出来ていたほどである。ぼくは心中に、頼光の奴、北洋漁業の実績など方々に問い合せていると睨んでいた。しかし、可否半々とも考えた。

三月に入ると、東北地方からの季節労働者との契約を始める必要がある。出漁の備船は、樽新さん第一回

から使用した昌徳丸、洋式三本マストの継続を話してあるが、これにも契約金支払いがあり、そのほか諸資材の用意もある。三月十日がギリギリと思うが、すでに三月五日であった。

初めての出漁である。なんとしても自分の力ですべてやりたいと思う。金融業・頼光は、近江岸から聞いていただけで初対面である。

三月七日、ようやく頼光も決心した。条件は、借入金三千円に漁期後の十月末、倍戻し六千円でよいか、となった。

現金を受取って、急拠北海道へ。出漁。昌徳丸よ急げ、である。

元来、ぼくは乗船すると風向き次第でどうなるものでもないと感じているので、呑気にかまえるのであるが、この時は例外。一刻も早くオバラにと、船足を気にした。

幸運にも好漁、すべて上首尾。大阪に元利金六千円を十月十日に完済。さすがに頼光高利貸しは、約束より早いので、利息を割引きすると金百円を返した。いまの百円はなんでもないが、当時は高級官吏一ヶ月の給料に等しい。金貸し頼光も、よほど嬉しかったのであろう。

「北洋漁業体験談」

進藤英太郎



進藤英太郎 北洋漁業現場にて、大正7・8年頃

(その一)

毎年、北洋の出漁期が近まると、日ソ漁業問題が新聞、テレビに報道される。また、北洋漁場の地名も出される。わたしは青年時代、それも半世紀以前になるが、カムチャッカ半島の西海岸に二回、東海岸にも二回、都合四カ年に四回、現地に渡航したことがある。

伯父の真藤慎太郎がカムチャッカに鮭鱒漁場を経営しており、これに現場要員として大正六年初めて西海岸のオバラという漁場に行った。十八才、まさに意気満々として出かけた。

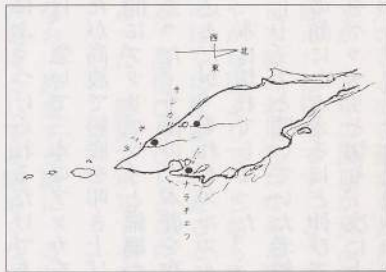
三露里(一露里は約一杆余)の間

隔を置いて北方キンカ川に至る間に十五カ所の日本人経営の漁場があり、主漁期(六〜九月)になると夜間照明のカーバイト灯が一斉に点火されて、昼間に水揚げした山なす鮭鱒を徹夜で処理するので、その夜景は実に壮観を呈した。

同年は大漁の歳であったが、最盛期は水面に溢れて岸に寄るため、手鍵でいくらでも取ることができた。本来の漁法は、漁区沿岸の海面に網仕掛けでとるのであるが、伯父の漁場では塩さけのほかに「さけ缶詰」の製造をしており、このため漁区内の工場に大阪方面からのハンダ付け職工を呼んでいた。缶詰めの仕上げは缶蓋の小穴をハンダでふさぐのである。

ところが、北方のキンカ河に寄った堤商会(後に日魯漁業として北洋漁業大合同をする)では、米国のセーフルフレザー商会によるオートメーションで缶詰仕上げできる機械装置を輸入しており、これに自家発電も設備するという状況であった。

この堤商会の漁区は、北に一二〇キロの距離があるが同漁場を私が実見したのは、伯父の指示でキンカ無線中継所へ、単身で行かされたからである。一日六〇料を歩いたと思う。



カムチャッカ漁場図
英太郎さん自画

途中、二晩を漁場に三時間位、寝かせて貰い、三日目に前記の堤商会のランチで大きなキンカ河を渡航させて貰ったので、この往復の際に堤漁場の新設備を見学、また説明も聞いた。

もう一つ驚いたことは、キンカ河の河口浅瀬に大きな鯨が数頭乗り揚げ、これに数知れぬアザラシも同様にした状況を眺め仰天したことである。

堤商会漁場には、一泊させて貰い、翌朝教えられた草原の小径を約十キロほど辿ると中継所の建物が見え、同所に三人の露人駐在員がいた。帰途、穴居している四人の日本人がいるのを見かけ声をかけたが、全然応答がない。後に、わかったことであるが、カムチャダルという現地の

土人で、あまりにも日本人そっくりの容貌をしていた。

(その二)

大正七年カムチャッカ州の首都、ペテロパウロスク市のアワチャ湾から東に約百キロ、ナラチュフ川から西へ三露里の漁場を伯父から受け持たされた。隣接して河口の東端にイワノフという露人経営の漁場があった。この海岸では、真藤とこの露人漁場の二個所だけであった。

露人漁場には、アワーリアとナリシャと呼ぶ十六才と十八才の美人娘も来ていた。この河口に直面した漁場は必ず露人専用の特定漁場とされ、日本人には日露漁業条約による規則で河口から三露里以上離れた海面沿岸漁区でないと租借人札が出来なかつたのである。

理由は母なる川に向かう鮭鱒は、まず、河口に近い陸岸に接近を始め、この間に熱烈な恋愛動作を演じ、河口では雌雄カップルになって上流にさかのぼる。このため河口近くが最も周密な鮭群となり、それこそ労力少なく最大の漁獲を容易に得ることが出来る。この有利な漁区は露人指定漁区として、日露漁業条約の細目に規定されていた。

なお、真藤漁区にはナラチュフ湖

からの清流が裏側に十五メートルほどの川幅で流れておりこれに巾着網式に仕切っておくと一起し二、三千尾の紅鮭が足も濡らさず捕獲でき、これは海に面する漁区ブラスの水揚げになった。

とかく海面漁区は、一度時化ると一週間は網建ての船が出せないこともあり、とくにこの年は酷い不漁に終わったのである。

この漁場では、二つの謎を私は今も抱いているので、以下これを書いておこう。一つは、昼間は聞こえぬが夜になって寝静まると、「オーシコイ、オッコイヨ、オーシコイ、…」と北海道の漁夫が三羽船を漕ぐ時の掛け声が聞こえてくるのである。浜に出て船影一つ見えない。漁夫達も皆聞いており、私の醋覚ではない。波の荒い時は、テンポを早めて激しく高鳴って聞こえるのである。

いま一つは、漁場から三十米ほど西に行くところ猫柳などにおおわれた小川があり、よく獺の尻を仕掛けに行つたが、その海岸にギラギラと一溜りの油が浮かんでいる。海に押し流して翌日行つて見ると同様に増減もなく浮溜りがある。難破した船がある訳ではなし、海水は綺麗で浮いた油など外には見当たらない。或は、地下

に油田があるのではないかと、思った。この疑問は今日も抱いている。もしかしたら、五十年も経た今日、ソ連のことだ、開発されてナラチュフの浜は、油田の町になっているのではなからうか、と考える。

(その三)

大正七年は、第一次世界大戦があり、北洋漁業に出漁する汽船のチャーターが出来ないのである。伯父は、仕方なく富山新湊の大神丸という三本マストの帆船を契約した。この帆船で私がカムチャッカ東海岸の漁場に行つたが、なにしろこの大神丸は絶えずポンプで海水を汲み上げねば海水が溜るといふボロ船であった。

それでも往航は追い風に恵まれて十七日間で渡航できたが、帰りは不漁で積み荷も軽いのに向い風ばかりで、四十日航海で、ようやく函館の街が見えた。ヤレヤレと喜んだのも束の間、本土方向から吹きつける風が暴風雨、今日でいう台風となつて風向きも変わり青森東方に流される始末である。やがて又風向きが変わって吹き戻され、大波を受けながら函館港の防波堤が見えるまで押し流されたのはよいが、なお風が強く肝心の舵がきかず、廻りこんで防波堤に入ることが出来ない。このままでは突

堤にぶっつけられるだけである。船長は、急いで二本のアンカを海に投じたが高波で船底を叩き上げられた瞬間にブッリブッリと錨綱が切れてしまった。予備の二本碇を次々に投げ込んだが、それもズルズルと流され一本は切れてしまった。

七十三才と聞いていた老船長は、私の顔にかぶさるほど伸びていた頭髪をバツサリと切り、次に上半身を裸にし、胸下に油紙包みの重要書類を手でおさえさせ、その上から上腹部にかけて晒(さらし木綿をいう)を力イッパイ身体がちぎれると思うほど強く締めつけて幾重にも巻き、さらにその上を荒縄でぐるぐる巻きにされた。船長が言うには、自分の少年時代(ちよん番時代という)日本海で乗船が遭難、多くの仲間が溺死したが、その時の老船長がお前は若いから助かってくれと、このようにしてくれた。おかげで自分は人事不省で陸に打ち上げられたが、奇跡的に人工呼吸の結果、命拾いしたと語ったのである。どんな水泳の達人でも水中で頭髪が頭にかぶさると体力を消耗し助からぬのだと説明してくれた。私もわかるような気がして心強くなったものだ。

船長にも、言ったが「俺は年だ」

と一言かえされただけであった。

天助と言うか、奇跡的に一本の碇が海底の岩場にでも引掛かったのか、船が止まって台風の通過に耐えた。これで嵐を過ごし函館ドック寄りに無事入港できた。これが大正七年九月、大被害をもたらした北海道台風である。

私は、先頃(昭和二十九年)北海道台風による青函連絡船「洞爺丸」の遭難で思ったことは、五十年前の老船長の行動とその心意気であった。

以上「北洋漁業体験談」の筆者進藤英太郎さんの紹介を次にする。

本名は、真藤辰五郎。明治三十一年十一月、福岡市薬院西川端(いま大名2丁目)出生。大名小から福岡商業16回生。同窓会誌の福岡通信に、在学中、松井須磨子の博多巡業「復活」を観劇し、早くもせりふを覚え学校の授業合間に声色を使い演劇達者を見せたという。

十八才で伯父真藤慎太郎の北洋漁業に従事、五十年後、東京新聞に求められ当時の体験談を寄稿されていた。かねて本誌のため写真等資料をお願いした横浜市在住の御息女嘉世子さんから写真と合わせてご送付いただいた。本誌の「真翁聞きがき」は

能古吟詠大会

東風吟詠会会長 和田 桜村

平成三年五月十四日

参加者 三十人

於 当館研修室

能古亀陽文庫には、福岡が生んだ大儒亀井南冥・昭陽父子、昭陽の娘少栗、門弟広瀬淡窓・旭窓、亀門の幹墨遺品が一堂に展示されており、我ら詩吟を学ぶ者にとっては、何よりも貴重な資料となっている。

わが東風吟詠会では去る五月十四日、亀陽文庫のご好意により、その研修室を借りて、創立三周年記念大会を開催した。本大会では、前記亀門の先賢達を中心に、これに関連する作品の吟詠に重点を置いた。九州三絶の一たる南冥作「鹿児島客中作」少栗の瑞々しい「江春晚望、園圃小景」等の瑤韻、頼山陽の「亀井元鳳(昭陽)招飲賦贈」は、山陽が博多来遊の折り、昭陽と親しく盃を交わした時の作で、知名の儒者同志の交歓を示す注目すべき七言律詩である。さらに、山陽は昭陽の案内で荒津山に曳杖詩を賦しており、この条幅は

当文庫に所蔵されている。また、山陽は、少栗の墨竹画を見て、その才能に驚き、詠懐一首を寄せている。これらの詩が次々に熱吟せられてゆく時、作詩者の御霊にも通じたのではないかと思ったのであった。

当日は、日夜亀井学の研究顕彰に努められている亀陽文庫理事長庄野寿人先生、亀井家後裔、早船正夫氏、亀井准輔氏、以上三人にご臨席賜り、ご講話、ご挨拶を戴いた。

大儒南冥とか亀井学という、何か遠い存在に感じていたわが会員達も、その遺品や子孫の方を目の当たりにして、改めて認識を深め、親近感を抱いたようである。風光明媚にして古来防人の地として万葉集にも詠まれたロマンの島に創設せられた、新名所亀陽文庫に於ける吟詠会開催は、かねて私の念願であったが、今日達成することができた。大会終了後は、渡船場近くの料亭で懇親会に移り、新鮮な魚菜に舌鼓を打ちつつ、清雅にして意義ある一日を終え、夕陽を浴びつつ、帰りのフェリーに乗り込んだのである。

能古博物館だより

然就寝(夜帰る。則ち雷山人来る。大喜し酒を命ず、陶然として寝に就く)

翌十七日「講了、山人既頓食將発強留之小酌……」これを訳すと、昭陽は早朝講義を終了。山人は既に早く食事をすませ正に出発しようとしている。強いてこれをとどめ軽く一杯、となる。

この後、少槲は亀井家滞在が見られるので夫君山人は小旅行に出たとされる。以後、少槲は塾講義に出席。また夜の詩会に出る記事がある。

少槲作詩を削る、と昭陽記録も見えるが、削るとは手直しの意味である。

なお、昭陽は九月中に書字帖四帖を仕上げている。

少槲は父昭陽著述を精写しているが、これを昭陽は遅いとして自分も手がけている。

十月八日、雷首書至、の記事あり、彼の他行がわかる。少槲は日々、夜も父稿の「蒙史」写本に励む。

十月十三日(前文略)：雷首帰、夜会左氏畢、與雷首飲、以上を訳すと、十月十三日、雷首が帰る。夜、左氏(春秋のこと)会講を終えて雷首と飲む、となる。

十月十四日(前文略)：畳屋瀨兵衛胎鯨三物曰、近来寓博多……雷首曰、僕欲問又右エ門消息久矣、講往叩之……

以上を訳すと、十月十四日畳屋瀨兵衛が鯨三ツ所(尾の身ほか美味な鯨肉を取る)物をくれた。自分は近来、博多に泊っている、と雷首曰く、僕は又右エ門を訪ねたいと思います。長らく便りを得ていませんので、平戸に行つて様子を見たいのです……と。畳屋は、西海の捕鯨王と呼ばれる益富家の屋号である。

瀨兵衛は、その一族中の者か、次の又右エ門云々は、益富家主人のことである。因に、益富家は亀井家を代々主治医としており、毎年又は再三、平戸生月島に往診して健康診断をしており、雷首の亀井家入婿は、この重要任務を継いでいる。

十月十五日……中略……雷首曰、先生下血不無酒毒、故約偶日飲、奇日否、夜半骨寒

十月十五日、雷首曰く、昭陽の痔出血は酒毒が無いではありません。このため偶数日は飲酒、奇数日は一切飲酒しないことにしましょう、と。昭陽は、これを聞いて夜半、骨が寒い思いをしたと解されるのである。

十月十八日、昭陽は、午後七杯飲んでいた酒を、雷首に言われ二杯を減

龜陽文庫・能古博物館友の会

- (福岡市) 天谷千香子・桑形シズエ 箕原 ヨネ・笠井 徳三・鬼塚 義弘 柳ノ瀬健次郎・三宅 碧子・亀井准輔③ 片桐寛子③・北原 章子・清田 友彦 近江 福雄・小田 一郎・松園 守一 永田 蘇水・古野 開也・岩重 一郎 長谷川陽三・竹中 弘起・廣瀬 忠 岡上 靖朝・山中 重太郎・野田和禮② 向井 盛信・小柳陽太郎・野田 元子 西嶋 洋子・柏 久・黒川 邦彦 速水忠兵衛・高田 浩二・馬奈木文衛 三好 恭嗣・田上 紀子・安松 勇一 山田由紀乃・上田 良一・西村忠行② 広瀬 猛・松尾 久・桑野 次男 大柳 孝子・片岡洋一②・青柳 繁樹 重松 義輝・青木 繁樹・中村 紀彦 星野 金子・岩重 二郎・吉村 雪江 坂田 泰滋・星野万里子・吉田 孝 椎葉 和郎・和田 一雄・花田 範之 藤木 充子・俵 信夫・金江たま子 岡本 金蔵・中畑 孝信・木戸 龍一 玉置貞正②・森藤 芳枝・西島道子③ 行成 宜貢・石川 文之・西川 真澄 片倉 智江・江口 博美・宮崎 和子 横山 智一・花田 菊子・山口 孝一 今村嘉代子・末松仙太郎・板木 継生 吉原 湖水・宮 徹男⑤・池上 澄子 安藤 光保・池田 邦夫・野間 フキ 和田 慎治・浦上 健・柳山美多恵 都筑 久馬・柴野美智恵・大石 忠生 吉村 陽子・安永 友儀・村上 昭子 鹿毛 義勝・安永 幸子・長 正彦 安部 利行・久芳 幸子・長 正彦 久保 喜蔵・吉田 澄彰・西 正憲 鍋山 駿一・那須 博・桃崎 悦子 石橋 観一・江島 寿人・鬼木 善夫 岩下須美子・吉長 秀子・土屋 正直 山口 朱美・磯崎 啓子・大庭 祥生

- 原 重則⑤・石橋七郎②・森 真吾 森岡 栄・三角 健市・織田喜代治 伊奈 義之・甲本 総太・渡辺 俊江 大串 梓・岸 洋子・林 十九楼 古賀 清子・前田 静子(大野城市) 伊藤 泰輔・田代 直輝・大西 節子 (春日市) 後藤 和子(筑紫野市) 川浪由紀子・脇山涌一郎・大森 節子 横溝 清・原 富子・西村 国典 (大宰府市) 有吉林之助・竹浜いち子 大谷 桂介・石田 秀利・本木 康枝 古賀 謹二・蔵田はつよ・松本 久子 吉塚 隆一・吉田案山子・坂本 斉子 佐藤かね子・浅野 加代・田中ゆき枝 永淵 純一・宗兼 仁子・村上美恵子 中村ひろえ・野田 明子・矢野 杏子 安住美代子・長沢 悦子・佐々木 謙 松尾マキ子・平岡 浩・西尾 弘子 (筑紫郡) 結城 慎也・添田 耕造 西村 久夫・荒井 昇・田中 文子 与那覇利三郎・上野 イヨ・坂井 勝己 山口 藤枝・大串ハマ子・古川 美子 宮嶋 秋子・八藤丸和子・渡部 良子 寺島 輝子(粕屋郡)・酒井 俊寿 柳田 正己・柳田 猷子・齊藤 良一 神崎憲五郎・青木良之助・安武 房子 松本雄一郎(宗像市)・大島 成晃 原田 國雄・木村 秀明(小郡市) 竹中 誠二・松澤アツ子(甘木市) 酒井カツヨ・佐野 至・泉 栄 三浦 末雄・具島 菊乃・井上 清③ 床崎 春夫・井手 太・田中トクエ 丸島 静・富田 英寿(糸島郡) 鬼丸 節次・高取 八山(糸島郡) 由比 章祐(柳川市)・川淵 学 庄野 陽一(八女郡)・松延 茂 (大牟田市) 嶽村 魁・古賀 義朗 杉原 守(直方市)・山本 利行 (筑穂町)・大久保智夫(苅田町) 木下 勤(鞍手郡)・久保田正夫 (飯塚市)・小山 元治(久留米市)

じ五杯にした。夜、左氏春秋の会講した後、十枚を写書し、疲れたので夜酌三杯して就寝する。

しかし、この以後、酒の記事なし。十月二十八日、玉蘭、春生米破我文、思以酒来故酒之。この訳は、奥村玉蘭(博多富商の奥村玉蘭のこと)これに絵師石丸春生の兩人が酒を提げて来たのである。

禁酒の書付を破る。思うに客が酒を持ち来ったので酒を飲まさないという法はなく、よって一緒に飲んだのである、と。

十月は、昭陽習字帖五冊を作っている。昭陽書、とくにその書法帖、習字帖を昭陽に求める者は多かったことがわかる。相応の謝礼を得ることもあり、この記事もある。このた

め昭陽を疲労させることも相当であったと思われる。少槩は、ほとんど実家泊りが多く雷首の医業も忙しいことがわかる。

なお、少槩は父の夜講義にも出席し、莊子と春秋の会講に参加する。こうした、生活の中で結局は、夫

君雷首も、百道の亀井家移転を決し、文政四年二月、井原村を引き払うのである。生家の好音亭も解体して百道亀井家内に移築する。

以後、しばらく昭陽の日記によって少槩を語ることにする。筆者よりおことわり。本稿前号は少槩ほか登載人物の年令を現代の満年令に改めています。しかし、登場する関連人物すべて往時の数え年であるため、今号から旧式に戻ります。

読者のコーナー

◎たくさんのお手紙を頂きましたので、その中から紙面の許す限りご紹介させていただきます。○島々に見えかくれゆく船見ゆる也良崎烽火跡に立つ

佐世保市 北原保彦・嘉子
唐津市 横井くに
横井様からは通信費にののお心遣いからお志と郵便切手を頂きました。

姪浜川柳会より会誌第86号【山口市】平野尊識様【春日市】相部千恵様

ほかの皆様よりお手紙を頂きました。ありがとうございます。

図書受贈

寺川泰郎著『小鹿田焼の変遷』
「亀井家学の真髓」
著者寺川泰郎氏よりご寄贈いただきました。ありがとうございます。

- 野田 正明(浮羽郡)・吉瀬 宗雄(北九州市)・平野 徹(片桐) 三郎(知足久美子)・石垣 善治(佐賀県) 中山 重夫(甲本) 達也(佐々木信子) 福水フミ代(山下) 郁夫(池田) 裕保(堀田) 和子(大分県)・橋本 敏夫(熊本県)・浜北 哲郎(山口県) 大塚 博久(平野) 尊識(大阪府) 小山 富夫(大橋孝太郎)・滋賀(小堀定泰)・(愛知県)・杉浦 五郎(庄野) 健次(神奈川県)・中野 晶子(東京都)・片桐 淳二(山根) 貞与(千葉県)・森 久(宮城県) 田中 信彦(北海道)・船越谷嘉一(注)は口倍数ご負担、(一)は前納年数です。

協賛会員(個人)

- 緒方 益男(佐賀)・伊藤 茂(倉屋市) 立石 武泰(福岡)③・白水 義晴(東京) 出光 芳秀(福岡)③・菅 豊登(福岡) 木原 敬吉(飯塚)・大里 豊男(福岡) 梅田 光治(福岡)・花田加代子(岡垣町) 西村 俊隆(東京)・池田 謙介(福岡) 今林 昇福(福岡)・高原 敬治(太宰府) 江崎 正直(天童市)②・中村 登(福岡) 小川 恒之福(福岡)・野口 一雄(福岡) 大坪 正治(太宰府)・奥村 宏直(福岡) 荒木 靖邦(福岡)・村上 五一(福岡) 七熊 澄子(太宰府)・多々羅幸雄(千葉) 早船 正夫(福岡)・七熊 太郎(長崎) 庄野 直彦(直方)・永田 蘇水(福岡) 七熊 正長(崎)・安陪 光正(福岡) 岡
- 【協賛会員(法人)】
南九大みやび・池田謙介(福岡) 葦 書 房 南・久本三多(福岡) 流通 共 済 南・花田積夫(福岡)② 物流システム(株)・平田真輝(福岡) 橋詰 工務店(株)・橋詰和元(福岡) 東洋特殊機工(株)・西尾敏明(福岡) 福岡流通警備保障(株)・村上五一(福岡) タイム社印刷(株)・安部栄一(福岡) 岡

能古博物館の会

※新規の御加入(先号以後、七月十日までは、右の地区ごとに記載いたしてありますので、何卒御芳名を御確認下さい。ありがとうございます。

友の会 年間3千円

(館)の活動、館誌購読と催事企画に参加 自然と文化の小天地創造

協賛会(個人) 年間1万円
〃(法人) 年間3万円

館維持、資料収集、施設整備等の資金援助を受け振替 福岡3160970

納入方法 郵便振替 財団法人 能古博物館 右の会費受領は、その都度本誌に掲載 以後会費相当期間を名簿にします。

お願い 送金は振替用紙(送料加入者負担)をご利用下さい。用紙はご連絡次第お送りします。

当博物館の活動、また絵画・古文書資料など当館に皆様のご支援をお寄せ下さい。

展示品紹介

優雅な文房飾りの紹介

昔の文机は、横幅四尺（約121㎝）、縦幅一尺六寸（約50㎝）。

机上の右側に、硯を中心に図示の書用具を常に配置、一つの常態飾りにしました。この飾りのポイントは硯屏です。硯屏は、書用具の中で直接に役立つものではありませんが、この飾り立ての中では重要な存在にされます。硯屏を頂点に、一直線に水滴、硯を並べ、この左に文鎮、右側の少し上に墨床（墨おき）、さらに右下に筆架（筆かけ）を配置、これに大小筆をおきます。筆架の代わりに筆筒（筆を立てて入れる）を使

うこともあります。

この配置は、なんでもないようですが、使用順になっています。

手紙、その他の書きものに際して用紙、用箋が机の中央に置かれ、机の中央に座した主人公は、用紙の上に、まず文鎮を、次に水滴を取って硯に水を、次は墨床にある墨を使い、筆を取ります。以上すべて硯のまわりを左から右廻りに使用し、元の位置に戻されています。硯屏だけは不動ですが、さながら主人の動作、用具の動きを端然と眺めているだけです。

古来、硯屏は用具を超越した存在で、配置の中心的道具にされ、硯屏がないと道具配置に締まりがなく、このため専ら美術品とされ主人公に眺め愛される有り用であったと思われる。優雅な道具の一つです。

最近の住まい、生活様式の

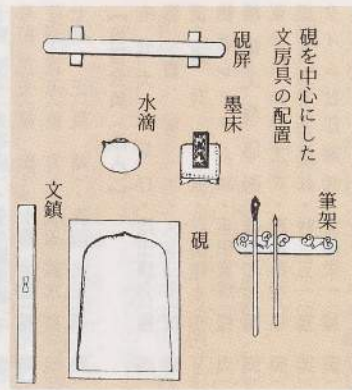


硯屏(中国清代)



透かし彫り硯屏「松竹梅」

房具飾り（文房具飾り）の種類を並べておきます。どうぞ、御一見下さい。係員が説明もいたします。



変化はこうした静のたたずまい、用具もなくなりつつあります。

書道は盛んですが、このような用具の飾りは見られなくなりました。とくに、硯屏、墨床と筆架など目立つてなくなりました。

いま、亀陽文庫・能古博物館は本館中央展示室の亀井常設展では、亀井学派の書、書法帳の出版に合わせ書道具を展示しています。

本号執筆者の紹介

安 陪 光 正 氏
「能古博物館を訪ねて」
元国立福岡中央病院神経精神科部長
浜江堂油山病院副院長
庄 野 寿 人 氏
「書法帖の話」
「真翁銅像物語」
「関秀亀井少乗伝」
勲亀陽文庫理事長

尚、本誌掲載の写真は、杉山謙氏撮影によるものです。

又、先号前田淑氏紹介において福岡女子短期大学は福岡女学院短期大学の誤りでした。訂正しておわびいたします。

編集後記

二度目の夏を迎え、当誌も今後は収蔵品の解説に、より重点をおいていきたいと思っております、ご要望をお聞かせください。

・能古博物館ご案内・

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)
休館日 毎週月曜
(月曜が祝日の場合は次の日)
12月29日~1月2日
入館料 大人300円・中高生200円
交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)
→能古(徒歩5分)→博物館
〒819 福岡市西区能古522-2
☎(092) 883-2881・2887
FAX(092) 883-2881